

OPI 形式のインタビューデータから見る「が」及び「けど」類の使用傾向 —職場会話との比較—

丁 琳

1. 目的

接続助詞「が」「けど」類の意味・用法・機能に関する質的な研究は多く見られるが、量的に「が」「けど」類という言語形式の使用傾向を扱った研究は管見によれば三枝（2007）しかない。ここでいう「けど」類とは、接続助詞「けど」「けども」「けれども」「けれど」のことである。三枝（2007）では、話し言葉のデータを分析することによって、「が」「けど」類それぞれの現れ方の実際を検討し、相違があることを指摘したが、職場という場面における会話であり、話し言葉全般にあてはまるものとは言いがたい。本稿は、インタビュー場面のデータを用い、三枝（2007）と比較することによって、計量的に両データにおける「が」「けど」類の使用傾向の差異を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

三枝（2007）では、『女性のことば・職場編』（1997）と『男性のことば・職場編』（2002）を資料として、「が」「けど」類について調査を行っている。電話、打合せ、会議などのフォーマルな談話も多少含まれているが、この資料の大半は休憩時や仕事に入る前の雑談などのインフォーマルな談話である。職場における会話であるため、本稿では以下「職場会話」とする。

三枝（2007）は、話し言葉において、もともと使用頻度の高い「けど」は、発話末で使われることが多く、モーダルな性格を示すと述べているが、これは職場会話に雑談などのインフォーマルな会話が多く含まれるというデータの質的な特徴によるものではないかと思われる。フォーマルな会話においては、現れるかどうかは不明である。

そこで、本稿では、話し言葉であり、かつフォーマルな OPI¹形式のインタビューデータを用い、三枝（2007）の職場会話と比較しながら、両データにおける「が」「けど」類の使用傾向の差異を明らかにしたい。

¹ OPI とは、外国語学習者の会話のタスク達成能力を、一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテストである。（牧野 2001 より）

3. 調査方法

3.1. 用例採集データの性格

本研究では北九州市立大学情報メディア工学科上村隆一研究室で公開されている「インタビュー形式による日本語会話データベース (1996) ² (以下「OPI 形式のインタビュー」と呼ぶ) を調査資料とした。一方、『女性のことば・職場編』(1997) と『男性のことば・職場編』(2002) (「職場会話」) を比較資料とした。

3.1.1. OPI 形式のインタビュー

OPI 形式のインタビューは、10 代から 60 代までの日本人男女 (男性 18 名、女性 32 名) によるデータである。

データの内容は、学生と社会人で異なる。学生の場合は名前、専攻分野、将来の仕事についての会話をし、社会人の場合は名前や仕事、住居などについての会話をしている。さらに社会的、時事的問題をテーマとして取り上げている。

なお、データの形式は、ACTFL (全米外国語教師協議会) の OPI (Oral Proficiency Interview) と呼ばれる会話能力試験の形に準拠しているため、インタビュアーの個人差による影響が少なくなっていると考えられる。インタビューは 3 部構成であり、導入部とそれに続く会話とロールプレイ部分、そして再び会話モードに戻ってインタビューが終わっている。

本稿はインタビューに限定するため、ロールプレイの部分 (約 4 万語) を削除した。その結果、調査資料のデータ量は約 21 万語³である。

3.1.2. 職場会話

職場会話は、職場における日本人男女 (男性 21 名、女性 19 名) による会話である。

会話データの場面に関しては、大きく「朝」「休憩」「会議」に分けられる。「朝」には、電話、仕事に入る前の雑談、外部からの訪問者との打ち合わせなど、フォーマル、インフォーマルいずれの談話も含まれている。会話の大半は休憩時や仕事に入る前の雑談などのインフォーマルな談話である。調査対象のデータ量は約 29 万語である。

3.2. 調査対象

調査対象となるデータは、プログラミング言語 Perl を用いて従属節末に「が」、「け

² 詳細は <http://www.cnv.kitakyu-u.ac.jp/corpus/> である。

³ 茶釜 (ver2.4.1) で形態素解析を行い、延べ語数を求めた。

ど」、「けども」、「けれども」、「けれど」を含む文である。その中から、以下の接続詞として使われている文(1)と文型「V-ようが V-ようが」⁴として使われている文(2)を対象外とし、接続助詞として使われている文を対象とした。

(1) だけど、あと一時間ぐらい待ってくださいって言われたので(うん。うん。)その後行ってみたらありました。(T.A.(F))⁵

(2) 確かになんか、もうどうでもいいようなね、(うん) 誰が結婚しようが(うんうんうん) 誰と誰が付き合って(うん) いようが(うん)、あの、別にね(うんうん)、関係ない(うんうん) じゃないっていうことまで追いかける必要はないような気が(うん) しますけれどもねー。(A.M.(F))

以上の基準により、接続助詞「が」(248 例)、「けど」(540 例)、「けども」(133 例)、「けれども」(608 例)、「けれど」(118 例)を選出し、本稿の調査対象とする。

3.3. 調査方法

本稿では三枝(2007)での調査結果と比較するため、同一の方法を採用する。上述の OPI 形式のインタビューから、まず「が」「けど」類の全体の使用頻度、発話内の位置による使用頻度を求める。次に「が」「けど」類に前接する述語を抽出し、述語の文体及び種類⁶などについて考察する。なお、OPI 形式のインタビューと職場会話の調査対象の性別・年齢はコントロールされていないため、本稿では、男女差及び年齢差による調査を行わないこととした。

4. 分析と結果

4.1. 「が」「けど」類の全体の使用頻度

職場会話と OPI 形式のインタビューで調査した「が」「けど」類の全体の使用頻度について、表 1 に示す。

⁴ 「V-ようが V-ようが」という文型はグループ・ジャマシイ(編)(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』より抜粋したもので、「V」は動詞を指す。

⁵ T.A.はインタビューを受ける人の名前の略で、(F)は女性をさす。以下 OPI 形式のインタビューデータから抽出された用例も同様に、前の二大文字はインタビューを受ける人の名前の略で、()内の大文字は性別を表す。

⁶ ここでいう述語の「種類」とは、「動詞述語・形容詞述語」のことではなく、三枝(2007)で述べている「頻出頻度の高い述語」のことである。

「が」「けど」類は、職場会話の約 29 万語⁷中 1499 例、OPI 形式のインタビューの約 21 万語中 1647 例出現し、OPI 形式のインタビューの方が「が」「けど」類がより多く出現している。そして、「が」の使用比率については、OPI 形式のインタビューは 15.1%で、職場会話の結果 13.8%と大きな差がない。また、「けども」と「けれども」の出現が少ないことも職場会話と OPI 形式のインタビューで一致している。

表 1 「が」「けど」類の全体の使用頻度

接続助詞	職場会話	OPI 形式のインタビュー
が	207 (13.8%)	248 (15.1%)
けど	974 (65.0%)	540 (32.8%)
けども	168 (11.2%)	133 (8.0%)
けれども	113 (7.5%)	608 (36.9%)
けれど	37 (2.5%)	118 (7.2%)
合計	1499(100%)	1647(100%)

なお、「けど」と「けれども」に関して、職場会話では一番多く使われているのが「けど」(65%)であり、「けれども」は 7.5%にとどまる。一方、OPI 形式のインタビューでは、一番多く使用されているのが「けれども」(36.9%)で、その次が「けど」(32.8%)である。以上の結果から、話し言葉の場面によって、職場会話では「けれども」より「けど」の方が多用されることと、OPI 形式のインタビューでは「けど」も「けれども」も多用され、しかも「けれども」の使用頻度が「けど」の使用頻度を上回る傾向が見られた。

4.2. 発話内の位置による使用頻度

職場会話と OPI 形式のインタビューで調査した「が」「けど」類の一発話内の位置による頻度を表 2-1 と表 2-2 にまとめた。

一発話とは、①意味のまとまりがある②ポーズがある③他者のさえぎりがないと三枝 (2007) で説明されている。

表 2-1 と表 2-2 の「発話中」とは、「が」「けど」類の後に読点がおかれて文が続く場合、「発話末」とは、「が」「けど」類が一発話の終わりに使われている場合をさす。

⁷ ここでいう語とは、茶釜 (ver2.4.1) で形態素解析を行った延べ語数のことである。

基本的には一人の話者による一連の発言と捉えられるものを一発話とする。「発話末」の「が」「けど」類に終助詞が付加する場合は、「発話末」として数えた⁸。

「発話中」：

- (3) 毎日感じておりますが、それはあの一、国民どうしの違いなのか、個人の違いなのかはわかりません。(C.O.(F))

「発話末」：

- (4) そんなことはないと思いますけど。(A.M.(F))

表 2-1⁹ 発話内の位置による使用頻度（職場会話）

	が	けど	けども	けれども	けれど
発話中	142(69%)	469(48%)	119(71%)	70(62%)	20(54%)
発話末	65(31%)	505(52%)	49(29%)	43(38%)	17(46%)
合計	207(100%)	974(100%)	168(100%)	113(100%)	37(100%)

表 2-2 発話内の位置による使用頻度（OPI 形式のインタビュー）

	が	けど	けども	けれども	けれど
発話中	183(74%)	391(72%)	109(82%)	495(81%)	72(61%)
発話末	65(26%)	149(28%)	24(18%)	113(19%)	46(39%)
合計	248(100%)	540(100%)	133(100%)	608(100%)	118(100%)

表 2-1 で示された結果と表 2-2 を比べると、まず、職場会話では、「が」「けども」「けれども」「けれど」は、いずれも「発話中」での使用が「発話末」での使用を上回っているが、「けど」だけは「発話末」の使用の方が多いと三枝(2007)は説明している。一方、OPI 形式のインタビューでは、「が」と「けど」類は、全体として「発話末」より「発話中」でより多く使われていることが分かる（表 2-2）。

「が」「けど」類それぞれについて、職場会話と OPI 形式のインタビューにおける「発話中」と「発話末」の頻度に有意な差があるかを明らかにするため、 χ^2 検定を行った。どのような検定を行なったのか、接続助詞「けど」を例として、下記の表 3 の

⁸ 例：鶏肉の胸肉だけはこっちが安いって思うんですけどね。(C.J.(F))

⁹ 表番号は本稿に従う。

ように示す。

表3 接続助詞「けど」の分布

観測値	発話中頻度	発話末頻度	総頻度
職場会話	469	505	974
OPI 形式のインタビュー	391	149	540
合計	860	654	1514
理論値	発話中頻度	発話末頻度	総頻度
職場会話	553	421	974
OPI 形式のインタビュー	307	233	540
合計	860	654	1514

その結果、「が」($\chi^2=1.490$, $p>0.05$)と「けれど」($\chi^2=0.566$, $p>0.05$)は有意な差は見られなかった。「けど」($\chi^2=83.295$, $p<0.05$)、「けれども」($\chi^2=21.299$, $p<0.05$)と「けども」($\chi^2=4.998$, $p<0.05$)は有意差が認められた。つまり、「が」「けれど」の場合は、「発話中」と「発話末」での出現には両データによる差がなく、「けど」「けれども」「けども」の場合は、「発話中」と「発話末」での出現に両データによる差があるといえる。特に、「けど」の場合は、「発話末」の出現が職場会話では多く、OPI 形式のインタビューでは少ないことが見られ、両データによる差異が明らかである。

三枝 (2007) は、「けど」だけは発話末の使用が多いことから、「けど」が接続助詞本来の用法とは異なる使い方をされていることを指摘している。また、「発話末」における「けど」について、白川 (1996) は日本語のくだけた談話（特に話し言葉）においては、接続助詞「けど」で言い終わる文がしばしば観察されると述べている。職場会話から以下の (5) (6) のように、終助詞的な用法として「けど」で言い終わる文が多く観察された。このように、雑談などのインフォーマルな会話が多く含まれている職場会話では、「けど」の終助詞的な用法が多用されていて、「発話末」に「けど」が多く見られた。一方、OPI 形式のインタビューでも「けど」で言い終わる文が見られたが、職場会話に比べると遥かに少ない。つまり、OPI 形式のインタビューのようなフォーマルなデータでは、(7) (8) のように、発話を最後まで言い切ることが求められ、「発話末」では「けど」はあまり出現しないと考えられる。

- (5) わたしは、きのう、多摩川の高島屋に行ったのよーって、こうゆう感じでしゃべるから、(あーあーあー) ふだんそうしゃべらないでしょうっていいたくるんだけどさー。(女性 9031) ¹⁰
- (6) なんだからしんないけどねー。(女性 3613)
- (7) あの一教員になりたいっておっしゃいますけど、どのレベルの、あの、先生/を、が志望ですか？(C.I.(F))
- (8) よく知らないんですけど、ただかかると、とにかくなんか、聞いたのは、胃で、胃で、は？¹¹胃酸には弱いので、胃が健康な人は、それほど大丈夫って (はん、はん、はん、そーなんですか) 誰かから聞いたんですけど、ただあの、胃酸でちゃんと殺されないまま腸にいつてしまうと、本当に大変なことになるっていう (はん) のを聞きましたけれども。(A.M.(F))

また、職場会話と OPI 形式のインタビューにおける「けれど」は、「発話末」の使用率が約4割を占めており、「発話末」の使用が少ないとは言えない。職場会話では「発話末」の「けれど」が4割強であり、「けども」と「けれども」がそれぞれ3割弱と3割強を占めており、はっきりした差が見られなかったが、OPI 形式のインタビューでは「発話末」の「けれど」が約4割であるのに対し、「けども」と「けれども」がそれぞれ2割に満たない。このように、同じ「けど」類でも話し言葉の場面によって「けれど」と「けども」「けれども」の使用傾向が異なることが指摘できる。この違いは助詞「も」によるものかどうか判断できない。今回の調査データでは「けども」と「けれど」の用例が少なかったため、さらに広範なデータで検証する必要があると考えられる。

4.3. 前接する述語の文体

職場会話と OPI 形式のインタビューにおける「が」「けど」類に前接する述語のスタイルを「です・ます体」「普通体」に分けて集計した結果が表 4-1 と表 4-2 である。

¹⁰ 『女性のことば・職場編』(1997) から抽出された用例である。

¹¹ 文中の「は？」は文字化された原文をそのまま引用したものである。

表 4-1¹² 文体別頻度（職場会話）

	が	けど	けども	けれども	けれど
です・ます体	201 (98%)	372 (39%)	102 (63%)	97 (86%)	24 (65%)
普通体	4 (2%)	592 (61%)	60 (37%)	16 (14%)	13 (35%)

表 4-2 文体別頻度（OPI 形式のインタビュー）

	が	けど	けども	けれども	けれど
です・ます体	247(99.6%)	510(94.4%)	128(96.2%)	588(96.7%)	112(95.0%)
普通体	1(0.4%)	30(5.6%)	5(3.8%)	20(3.3%)	6(5%)

三枝（2007）では、「が」は「です・ます体」（98%）、「けど」は「普通体」（61%）とともに多く使われると述べられているが、(9) (10) のように、OPI 形式のインタビューでは、「が」と「けど」は共に多く使用され、それぞれ 99.6%と 94.4%という結果となった。

- (9) あの一、マニュアルとしてはそういうものがあるという話はしますが、それを個々にあの一、データとしてですね、（ああ）そろえてはまだありません。（T.T.(M)）
- (10) 朝（うん）ちょっと恥ずかしいんですけど、ほとんど午前中の授業はさぼってしまふんですね。（M.I.(M)）

「けど」が職場会話では普通体に、OPI 形式のインタビューでは「です・ます体」に多く前接するという話し言葉の場面による違いが見られた。それは、職場会話自体に「普通体」が多く、OPI 形式のインタビューに「です・ます体」が多く出現しているからではないかと考えられる。そこで、職場会話と OPI 形式のインタビューの全体の「です・ます体」「普通体」を調べてみた。調査する際、基準を統一するため、発話の文末に出現している「です・ます体」「普通体」を全体の文体として数えた。その結果、職場会話では、「です・ます体」と「普通体」がそれぞれ 25.7%と 74.3%を占めるのに対し、OPI 形式のインタビューでは、「です・ます体」と「普通体」がそれぞれ 91.4%と 8.6%を占めるという結果となった。つまり、「けど」が職場会話では普通体

¹² 三枝（2007）の文体別頻度から抜粋した表で、男女の文体別頻度については、本稿の研究対象ではないので除外した。そして、表 4-1 の合計数は、表 1～表 2-1 と異なる。これは、助詞の前の述語が聞き取り不可能な例があるためである。

に、OPI 形式のインタビューでは「です・ます体」に多く前接するということは職場会話と OPI 形式のインタビューの全体の文体による可能性が指摘できる。

なお、「が」については、職場会話と OPI 形式のインタビューにおいて 98%と 99.6%という比率で「です・ます体」に接続していることから、両データによる差がほとんど見られなかった。一方、「けど」類については、職場会話と OPI 形式のインタビューにおける「です・ます体」「普通体」の頻度に差が見られた。そこで χ^2 検定を行う。「けど」を一例として、下記の表 5 に示す。

表 5 接続助詞「けど」の分布

観測値	です・ます体頻度	普通体頻度	総頻度
職場会話	372	592	964
OPI 形式のインタビュー	510	30	540
合計	882	622	1504
理論値	です・ます体頻度	普通体頻度	総頻度
職場会話	565	399	964
OPI 形式のインタビュー	317	223	540
合計	882	622	1504

その結果、「けど」($\chi^2=445.233, p<0.05$)、「けども」($\chi^2=47.082, p<0.05$)、「けれども」($\chi^2=23.734, p<0.05$)と「けれど」($\chi^2=23.650, p<0.05$)は有意差が認められた。よって、このことから、「が」の場合は、両データにおける「です・ます体」「普通体」の出現に差がなく、「けど」「けども」「けれども」「けれど」場合は、「です・ます体」「普通体」の出現がデータによって差があるといえる。

4.4. 述語の種類

「が」「けど」類に前接する述語を調べる際に、三枝 (2007) と比較の方法を同一にするため、三枝 (2007) と同様の述語 (「いい」、「と思う」、「と言う¹³」、「ある・いる¹⁴」) を選出した。両データにおけるこの 4 つの述語の分布を表 6-1 と表 6-2 に示す。

¹³ 「と言う」は「と申す」、「と言われる」等を含む。

¹⁴ 「ある・いる」には、「ことがある」を含め、「動詞+てはいる」は含めない。

表 6-1 「が」「けど」類に前接する述語の分布（職場会話）

	が	けど	けども	けれども	けれど	計
と思う	34	120	20	11	1	186
ある・いる	12	55	17	10	0	94
いい	2	65	5	5	5	82
と言う	12	44	6	4	0	66

表 6-2 「が」「けど」類に前接する述語の分布（OPI 形式のインタビュー）

	が	けど	けども	けれども	けれど	計
と思う	34	71	14	72	15	206
ある・いる	29	51	13	72	10	175
いい	3	2	2	4	1	12
と言う	7	19	5	26	2	59

表 6-1 と表 6-2 でいう「いい」は、「のはいい」、「てもいい」、「ば／たら／といい」等の「いい」類である。以下の (11) は「いい」類の例である。

- (11) ええ、ずらせるといいんですけど、あのお盆の行事っていうの田舎はもう日にちが
 (あっ、はい) どうしても 14、15 (ふーん) にかかるもんですから (ふーん)
 そのぎりぎりに行って 20 日前後に帰ってきますとかね (ああ)。 (K.J.(F))

まず、「のはいい」、「てもいい」、「ば／たら／といい」などの「いい」類について、山田 (2000) は、こうした用法の「いい」は、基本的に「ある事態を受け入れることができる」ということを示すと述べている。三枝 (2007) は、「いいけど」は、「と思う」と同じく、断定的な判断を避けるために使われており、「と思うけど」以上に、「けど」との結びつきが強いと指摘したが、OPI 形式のインタビューでは「いい」と「けど」の共起が 2 例と極めて少なかった。上記の (11) のように、「いいけど」は相手の意見や事態を先に受け入れる表現として、会話のやり取りの中でよく使用されているものである。特に、コミュニケーション重視の職場会話では「いいけど」が多用されていることが考えられる。一方、OPI 形式のインタビューはコミュニケーション重視というより主に問答形式によるものであるため、「いいけど」の出現が極めて少なかっ

たものと推測される。

次に、三枝 (2007) では、「が」「けど」類に前接する述語の中で「と思う」が多かったと述べている。今回の調査でも、「が」「けど」類に前接する述語の中で「と思う」が最も多く見られた。

(12) あの一、ん、まあ、多分、忙しいのが好きなん、性格だと思うんですけれども、昔からあの一、テニスをやっております、あの最初一、日本語教師を始めた頃は、あのテニス無しか日本語教師無しかといういう¹⁵ような（ああ一）感じ、でやっていたんですね。 (K.I.(F))

(13) それにそんなに、暑く感じないっていうかあの、（ああ一）うーん、（そう）あの眠れない夜っていうのありますけれども、（うんうん）関西ほどやっぱり多くはないので、（うーん）意外とわたくしは過ごし易いなどは（ふんふんふん）思っているんですけれども、ただまあほんとに、外へ出られれば、（うん）その方がいいんですけども、（うん、うんうん）あ一、ただあの一、うちの主人の、実家が信州にありますので、（はい）必ず夏はそちらの方にも少し、帰りますので、あの、それは快適な、（うん、うん）期間で。 (Y.M.(F))

森山 (1992) は、「と思う」の基本意味を「個人情報」の表示」ととらえ、さらに、前に来る情報を、不確実なものとして表示する場合と個人的な意見として表示する場合とに分けた。上記の (12)が不確実、(13)が個人的な意見を表す「と思う」に当たるだろう。職場会話と OPI 形式のインタビューにおいて、「が」「けど」類が「と思う」と共起することによって、断定的に言い切ることが回避できるためであると思われる。

なお、「と言う」について、「が」「けど」類に前接する述語の出現度数から見ると職場会話と OPI 形式のインタビューにはそれほど大きな差がない。しかし、両データ全体の「と言う」の出現を考慮すると、職場会話においては、全体で「と言う」が 434 例現れ、「が」「けど」類に前接する「と言う」が 66 例で、出現比率が 15%である。それに対し、OPI 形式のインタビューにおいては、全体で「と言う」が 226 例現れ、「が」「けど」類に前接する「言う」が 59 例で、出現比率が 26%であり、両データにおける「と言う」の出現比率に差が見られた。そこで両データにおける「言う」の出現に有意な差があるのか、 χ^2 検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2 =$

¹⁵ 文中の「といういう」は文字化された原文をそのまま引用したものである。

7.631, $p < 0.05$)。つまり、「と言う」の出現は、両データによる差があり、職場会話より OPI 形式のインタビューでの出現比率が高いという結果となった。

(14) さっきコミュニティーとおっしゃってたけれどもそういうことですね？

(インタビュアーより)

(14)のように、「と言う」は、ほとんどインタビュアーの質問に見られ、インタビュアーがインタビューを受ける人の言葉を引用するという形で客観的な事態を表す述語である。OPI 形式のインタビューの場合は「が」「けど」類が客観的な事態を引用する節で多用されていることが指摘できる。

また、三枝 (2007) では、「けど」節に現れる述語で2番目に頻度の高い語は「ある・いる」であったと述べているが、本稿でデータ全体に現れる述語について調べた結果、両データでは「ある・いる」の出現度数が一番多かった。職場会話においては、全体で「ある・いる」が1857例現れ、「が」「けど」類に前接する「ある・いる」が94例で、出現比率が5%である。それに対して、OPI 形式のインタビューにおいては、全体で「ある・いる」が32608例現れ、「が」「けど」類に前接する「ある・いる」が175例で、出現比率が0.5%である。したがって、「が」「けど」類節に現れる「ある・いる」の多用は接続助詞「が」「けど」類と関係なく、職場会話と OPI 形式のインタビュー全体に「ある・いる」が多いためではないかと思われる。

このように、「が」「けど」類に前接する「と思う」の使用は、職場会話と OPI 形式のインタビューにおいて共通しているが、「のはいいい」、「てもいい」、「ば／たら／といい」並びに「と言う」と「けど」の共起は職場会話と OPI 形式のインタビューによって、使用傾向が違っていることが指摘できる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、三枝 (2007) と比較しながら OPI 形式のインタビューに注目し、「が」「けど」類の使用傾向を分析した。OPI 形式のインタビューにおける「が」「けど」類の使用傾向を、職場会話と比較してみると、はっきりした差異が見られた。まず、OPI 形式のインタビューでは、「けれども」の使用頻度が「けど」の使用頻度を上回っている。次に、「けど」の出現は発話末より発話中で多く見られる。そして、前接する述語の文体は「普通体」より「です・ます体」が多用されている。前接する述語の種類について、「のはいいい」、「てもいい」、「ば／たら／といい」並びに「と言う」と「けど」の共

起は職場会話と異なることが明らかになった。これらの差異は主に職場会話と OPI 形式のインタビューがそれぞれ持っている性格により生じたものであると考えられる。つまり、「けれども」の多用、「けど」の「発話中」の多用、前接する述語の「です・ます体」の多用は OPI 形式のインタビューのフォーマリティによるもので、「いいけど」と「と言う」の使用傾向はインタビューの問答形式という特徴によるものであると考えられる。

また、接続助詞「が」は両データにおける使用にほとんど差がなく、「けど」類はデータによって差異があることが明らかになった。今までのような類似表現の研究では「が」と「けど」類を扱ってきたが、「けど」類に限って差異を探る必要がある。今後、引き続き講演などを比較し、話し言葉における使用傾向を明らかにしたい。

次に問題点について述べる。今回は三枝（2007）と同一の方法を用いて職場会話と OPI 形式のインタビューを比較し、両データによる違いを検証したが、三枝（2007）の方法よりも、さらなる観点から比較する必要があると考えられる。例えば、「が」「けど」類に前接する述語の種類について、三枝（2007）と同様の四つの述語に調査するだけでなく、さらに詳細な分類が必要となる。また、両データの「発話位置」の比較について、三枝（2007）との発話基準が完全に一致していないことの問題点が挙げられる。今後、発話基準の統一性のあるデータでの比較も試みてみたい。

参考文献

- 現代日本語研究会編（1997）『女性のことば・職場編』ひつじ書房
現代日本語研究会編（2002）『男性のことば・職場編』ひつじ書房
白川博之（1996）「「けど」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』6, pp.9-17.
三枝令子（2007）「話し言葉における『が』『けど』類の用法」『一橋大学留学生センター紀要』10, pp.11-27.
森山卓郎（1992）「文末思考動詞「思う」をめぐって一文の意味としての主観性・客観性」『日本語学』11, pp.105-116.
山田 進（2000）「「いい」の意味論—意味と文脈—」『日本語意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集』pp.125-142. ひつじ書房

（てい りん・首都大学東京大学院生）